学生レポート

「学生が変える日本大学」
―「令和5年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」に関する報告書―

相﨑大地[1),3)]，荒木姫菜子[1),4)]，根岸啓斗[1),5)]，垂見麻衣[1),6)]，望月咲優[1),7)]，沈　恩妃[1),8)]
竹田蘭丸[1),9)]，山本峰広[1),10)]，渡　祐太[1),11)]，大久保真菜[1),12)]，大賀尚輝[2),13)]，早乙女雅哉[2),14)]

※[1)]「令和5年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」学生スタッフ，
[2)]「令和5年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」公募ファシリテーター，[3)]日本大学商学部商業学科3年，
[4)]日本大学松戸歯学部歯学科2年，[5)]日本大学生物資源科学部バイオサイエンス学科1年，
[6)]日本大学通信教育部商学部商業学科3年，[7)]日本大学理工学部物質応用化学科1年，[8)]日本大学商学部商業学科1年，
[9)]日本大学国際関係学部国際総合政策学科4年，[10)]日本大学経済学部経済学科4年，[11)]日本大学工学部情報工学科4年，
[12)]日本大学商学部会計学科3年，[13)]日本大学法学部政治経済学科2年，[14)]日本大学工学部 環境安全工学科１年

は じ め に

「日本大学 学生 FD CHAmmiT」とは，全国の大学が集結する「学生 FD サミット」の「日本大学版」である。「学生 FD サミット」とは全国の大学から学生 FD 活動に取り組む学生・教員・職員が一堂に会し，各大学における活動や成果を発表しあい，大学教育における課題等を共有し，議論する場である。一方，「CHAmmiT」とは，chat と summit をかけ合わせた造語であり，大学をテーマに友だちとチャットをするように気軽に話し合い，その成果を発表する場である。私たちが学ぶ大学での教育をより良くしたいという思いに基づき，学生のみならず，教職員が参加していることも大きな特徴である。

日本大学の FD 活動の歴史について少しだけ紹介すると，活動が始まったのは平成 20 年からであり，大学の創設された年から考えるとはるかに歴史は浅い。しかし，他大学の FD 活動に参加し，熱心に情報収集した先輩方の尽力もあり，「日本大学　学生 FD　CHAmmiT　2013」の１回目が開催された。この１回目の日本大学による「学生 FD サミットモデル」が画一されたことで，現在までの FD 普及の足掛かりとなり，今年度も同様に開催されるまでに至っている。この歴史の浅い新たな活動がここまで評価され今日まで続いていることは，ＦＤ活動関係者一同感慨深いものがある。

今回で 11 回目を迎える「令和５年度日本大学 学生 FD CHAmmiT」（以下，CHAmmiT）は，対面形式で開催され，230 名の参加があった。今年度のテーマは，「あなたにとって大学とは何ですか？～日大教育の未来を語ろう～」である。昨年度のテーマに「日大教育の未来を語ろう」を加えたことが特徴である。学生生活に関して幅広い内容を話し合える環境は残しつつ，CHAmmiT の原点に返り，より教育改善に重点を置くことを意図してテーマ設定をした。

投稿：2023年1月16日　　受理：2024年2月29日

１．今年度の「CHAmmiT」の概要と流れについて

１－１　第１回スタッフミーティング（令和５年６月24日）

第１回ミーティングは，学生スタッフと教職員を交えてオンラインにて開催し，互いに自己紹介をして交流を深めることになった。CHAmmiT の概要説明と，役割決めを行い，今年度の CHAmmiT で行うメインのテーマについても，例年の成果を参考に議論した。アフターコロナとなった今だからこその「大学の在り方」とは何なのか。その意図に沿いながら新しい教育改善につながるテーマを検討した。様々なバックグラウンドをもち，目的意識の下，各学部から集まったスタッフだからこそ，互いに初対面にもかかわらず，活発な意見交換をすることができた。

１－２　第２回スタッフミーティング（令和５年７月15日）

第２回ミーティングでは，今年度のテーマが「あなたにとって大学とは何ですか？～日大教育の未来を語ろう～」に決定した。昨年度のテーマを踏襲しつつ副題を定めることにより，昨年の議論をより掘り下げていくことが目的である。今年は本番までの期間が短くなった影響で，ファシリテーション研修の機会だけでなく準備時間も減少することが予想された。そこで，キャプテン主導の下，有志にてオンラインでの研修も計画することになった。

「思い描いた大学生活を送れていますか?」というテーマで，CHAmmiT 本番を想定した本格的なファシリテーション研修を行った。ついては，今年から原則対面授業となったことによる，アフターコロナを意識しての議論を重ねた。ＩＣＴツールを活用した対面授業やオンライン授業とのハイブリッド化，講義動画の必要性など，授業に関係することも含め，他学部や他大学との交流の少なさや設備面の不安を指摘する学生も見られたことが印象深い。

１－３　第３回スタッフミーティング（令和５年８月８日）

第３回ミーティングは，「あなたが大学に望む教育はなんですか？」，「あなたにとって大学とはなんですか？」をテーマに話し合い，ファシリテーション研修を行った。

第３回は，前回の研修に比べて画期的な意見も出される一方で，議論を進めるうちに自分が入学時に求めた理想と現在とのギャップに触れ，問題点について述べていたグループも多くあった。大学が何のためにあるのかを改めて全体で再確認するとともに，現状との違いを深く考察できるミーティングとなったことは明らかである。

１－４　第４回スタッフミーティング（令和５年８月22日）

第４回ミーティングも対面での開催となり，本番と同様の時間をかけ，アイスブレイクからセッション１～３まで通しての研修が行われた。今回から積極的に公募ファシリテーターが練習に参加することになり，学生スタッフもより気を引き締めて研修に取り組むことになった。

学生スタッフからはまだファシリテーションに不安な声もあったが，定期的なオンライン研修の成果もあってか，初回に比べてたどたどしさは減った印象である。近年，対面での授業が増えたものの，オンライン授業でのメリットが活かされないまま対面授業に戻るのは勿体ないと考える学生が多く，理想に向けて学生の高い学修意欲が表出するような議論となっていたように感じられる。

１－５　第５回スタッフミーティング（令和５年８月30日）

第５回ミーティングは対面のみでの開催となり，当日運営の流れを確認しながら，ファシリテーションマニュアルの読み合わせを行った。セッションでの立ち回り方を確認したことで，残りのミーティングの少なさを再認識することになり，より緊張感を持ったファシリテーション研修となった。

セッション１の「大学で，何を，何のために，どのように学びたいと思う？」は，時間の関係上，割愛することで，セッション２「あなたが望む教育は何ですか？～あなたの理想は達成できていますか？～」と，セッション３「あなたにとって，理想の大学とは何ですか？～学部への提案～」の不安点や疑問点を集中的に洗い出すことにつながった。

またファシリテーションマニュアルに対し，質疑応答・意見交換の時間もあり，付箋の色やセッション２のグルーピングの仕方に関して検討することになった。ファシリテーションマニュアルをただ読むだけでなく，しっかりとスタッフ間で確認し合うことで，それぞれが主体的にCHAmmiT本番を意識しながらファシリテーションを行うようになった回と言える。

１－６　第６回スタッフミーティング（令和５年８月31日）

第６回ミーティングも前回に引き続き，対面のみでの開催となった。ファシリテーション研修に加え，全体の流れを確認し，疑問点の解消や場のまとめ方の練習もすることになり，ファシリテーターとしてのレベルアップを図った。

第６回は，あえて話し合いを乱す存在を１人グループに入れた状態で練習を行った。本番はそんな存在により，議論の紛糾が十分に起こり得る。時間が定められている以上，時間のロスは死活問題である。この回により，話が脱線しないように誘導する能力や，内容を深堀りする能力，あらゆる想定外に対応する能力が身に付いたのではないだろうか。また，些細なことにも多くの質問や同意，補足意見が飛び交っていた。大学教育について，ますます考えが深まった証拠であると考えられる。残りの前日リハーサルもCHAmmiT本番に向けて，最良の準備ができていたのではないかと，今では確信している。

１－７　第７回スタッフミーティング（前日リハーサル）（令和５年９月９日）

第７回ミーティングは，日本大学 学生FD CHAmmiT前日に開催された。翌日の本番に向けて情報共有，会場設営，アイスブレイク，セッション１からセッション３までを通してのリハーサルを行った。

午前中は，各講堂の設営準備にあたる班，案内図やポスターの掲示にあたる班，オープニングとエンディングの機材確認とリハーサルにあたる班に分かれ，スタッフ全員で協力して会場設営にあたった。通信教育部の机を動かし，模造紙や付箋，マーカーなどのしゃべり場の準備を行った後，午後からは本番と同じようにリハーサルを行った。本番直前の緊張感からか，新たに疑問点が生まれ質問しているスタッフも多く，有意義な時間にすることができたと言えるだろう。

１－８　令和５年度 日本大学 学生FD CHAmmiT当日（令和５年９月10日）

令和５年度は，対面での開催となった。対面とオンラインのハイブリット形式で開催された昨年度とは異なり，今年度は参加者全員が通信教育部に集い，学部，学年，出身を問わず活発な議論が行われた。

スタッフは，参加者と見分けがつくように揃いのＴシャツを身に着け，ネームプレートを首から下げてファシリテーションした。参加者にも同様のプレートを作成してもらったことで，顔と名前が一致しやすく，互いに名前を呼びながら意見交換ができるということで好評であった。「直接」顔を合わせながら議論できた成果は大きい。昨年度のテーマを踏襲し，内容を掘り下げることを目的として設定した今年度のテーマによるCHAmmiTは大成功であった。

１－８－１　10：30　スタッフ集合

スタッフは，日本大学本部大講堂に集合した。今年度のCHAmmiTスタッフＴシャツを着用し，出欠確認をした。

１－８－２　10：30～11：00　全体スタッフミーティング

キャプテンからの挨拶後，ファシリテーションマニュアルを使っての流れの確認と業務連絡をした。スタッフは役割に応じて，通信教育部の建物へ移動した。

１－８－３　12：00～　参加者受付開始

参加者は通信教育部に集合し，スタッフの案内に従うことになるので，会場に参加者が揃うまでは機材の最終確認や備品の確認，出席確認を行った。入室管理では，参加するグループ番号を事前に設定していたため，それぞれのセッショングループにおける人数調整の要否確認を行った。

１－８－４　13：00～13：25　オープニング

オープニングムービーでは，芸術学部３年の山下さんが司会進行を務め，日本大学FD推進センター長を務める松戸歯学部の河相安彦教授や生物資源科学部３年の田中キャプテンが挨拶をした。CHAmmiTの説明と当日のテーマやスケジュールの共有，注意事項の案内が法学部３年の本間さんからあり，しゃべり場をより楽しんでもらうためのコツが共有された。

１－８－５　13：２５～13：35　アイスブレイク

メンバーが揃ったグループから，簡単な自己紹介と「今の学部･学科に入ってみて良いと思うところはどこ･何ですか？」というテーマで，自由に会話を楽しんでもらった。各参加者には，自分のアイデアをA4用紙に書き出してもらい，学部の異なる参加者同士が初対面でも会話を楽しんでもらう機会とした。

１－８－６　13：35～14：10　セッション１「大学で，何を，何のためにどのように学びたいと思いましたか？」

セッション１では，学部混合グループに分かれ，大学で学ぶ目的について議論した。このセッションでは，参加者が普段の大学生活で「何を，何のために，どのように」学んでいるかを考えてもらう形式で意見の共有をした。グループ毎，模造紙に各自の意見を付箋で張り出し，次に，各参加者が大学に通う目的を整理した上で，授業環境で良かった点，要望，改善すべき問題点について，意見交換を行った。日本大学に進学した理由や現在の目標を再確認することで，進学前に求めていたものや現状の困っていることを参加者自身で整理してもらったが，そこには続くセッション２･３で意見を出しやすくする意図があった。

１－８－７　14：25～14：35　アイスブレイク

学部混合で実施したセッション１とは異なり，セッション２･セッション３は学部ごとのグループ編成で行った。セッション１の前と同じテーマでアイスブレイクを行って意見を出しやすい環境づくりを図った。

１－８－８　14：35～15：20　セッション２「『あなたが大学に望む教育は何ですか？』あなたの理想は達成できていますか？」

セッション２では，実際の授業環境における理想と現実を共有した。また，実際の授業環境で満足している点・不満な点をピンク色の付箋で，理想とする授業環境を緑色の付箋でそれぞれ色分けして意見共有して

もらうことで，授業環境の充実度を視覚的に把握できるようにした。理想と現実の意見出し終了後，付箋のグルーピングを行い，各学部の理想の日大像・理想の学部像を確認した。

1－8－9　15：30～16：20　セッション3「あなたにとって，理想の大学とは何ですか？～学部への提案～」

セッション3では，同じ学部で集まってもらい，他学部で実施されているが，自学部に取り入れられていない制度など，これまでのセッション1とセッション2で議論・共有した内容を基に，自学部と大学に提案したいことについて話し合った。このセッションでは，学部提案書を作ることを目標にした。グループ参加者は，自身が感じる不満点を改善するためのアイデアや他学部で実施されている有用な制度の共有を行い，日本大学全学で取り組むべき企画や自学部で実施してほしい取組の案をまとめた。

1－8－10　16：25～17：00　エンディング

エンディングでは，セッション3で作成した学部提案書の発表が部屋ごとに行われた後，Zoomに接続し，芸術学部3年の山下さんが司会進行を務め，林真理子理事長，酒井健夫学長にご講評いただき，相﨑キャプテンが挨拶をした。その後エンドロールを上映し，部屋ごとに集合写真を撮影後，令和5年度CHAmmiTは閉会となった。

2. 参加者の制作物の分析

本節では，「令和5年度 学生FD CHAmmiT」のセッション1～3の制作物の分析を行う。

セッション1　テーマ『大学で，何を，何のためにどのように学びたいと思いましたか？』

セッション1では，学部混合でのグループに分かれて，模造紙と付箋を用いて，「大学で学ぶ目的」をみんなで考えて話し合った。「何を」「何のために」「どのように」の3つの項目で分けて，大学で学ぶ目的や実際とのギャップを挙げていった。次に良かった点，問題点，要望についても同様に挙げていった。学びをアウトプットするためのグループワーク等の学生間交流についてや，Wi-Fiをはじめとする授業環境等についての意見など，アフターコロナならではの意見が多く出たと感じる。また，コロナ明け初の完全対面での開催ということもあり，緊張も見られたが，，つつがなく進められていた。

セッション2　テーマ『「あなたが大学に望む教育は何ですか？」あなたの理想は達成できていますか？』

セッション2からは，同学部で集まり，セッション1と同様に模造紙と付箋を使用した。セッション1では，自分の大学に通う目的や授業環境で良かった点などを挙げてもらったが，セッション2からは，セッション1の内容を活かし，学生，教員と職員の3者の立場から意見を挙げてもらい，日本大学の教育の理想と現実の差として，「各学部の改善できる問題点は何か？」を「現実」と「理想」の2方向から深く掘り下げていった。セッション3の学部提案書につながる大切なセッションであるため沢山の意見が出てきた。コロナ禍の影響が強く残る学部からはコロナ以前のような授業形態を求める規制緩和に関する案，それ以外の学部では各学部の特色をより活かせる改善案が出ていた。

セッション3　テーマ『「あなたにとって，理想の大学とは何ですか？」～学部への提案～』

セッション3では，セッション2と同様のメンバーで，これまで話し合ってきた内容を活かし，学部ごと

に「理想の大学生活について」話し合った。そして，その内容をより具体的な提案書という形で記していくにあたり，「学部を『理想の学部』にするための提案」，「日本大学を『理想の大学』にするための提案」の２つの項目について書いてもらった。これにより参加者もより明確に自分の考えを整理することができた。

学部	理想の学部にするため提案	日大教育の未来のビジョン
１－法学部	ａ．履修人数が比較的少ない授業でのグループワークの実施 ｂ．法曹や公務員で活躍している卒業生の方々との交流 ｃ．設備改善（Wi-Fi の接続の統一） ｄ．学部内に発信できるツール ｅ．４年次の履修単位の改善	Ａ．PBL 授業の実施 Ｂ．CHAmmiT のような学部間交流 Ｄ．日大全体に発信できるツール Ｅ．日大全体の組織内の管理の徹底
２－文理学部①	ａ．レポートの提出をオンラインに統一 ｂ．教職課程を受講している学生に対しての時間割の配慮 ｃ．オンデマンド授業の時間割 ｄ．学部内での様々な学科との交流機会 ｅ．自習スペースや図書館の利用時間の延長	Ａ．提出方法の統一化，シラバスに明記 Ｂ．教職課程と必須授業のカリキュラム改善 Ｃ．時間割を固定化させないようにシラバスに明記 Ｄ．全学科共通科目の設置，学科内でのワールドカフェの開催 Ｅ．目安箱の設置
３－文理学部②	ａ．他学部と交流できる機会のある授業の新設 ｂ．アクティブラーニングを取り入れた授業の提供 ｃ．バーチャルリアリティ ｄ．将来設計を学べる授業 （学部の OB・OG を招待した講演会など）	Ａ.「日大ブランド」の強化 学部学科が多岐にわたって交流できる大学 Ｂ．様々な専門的な知識に触れ，刺激を得て将来設計を行い，着実に夢へのステップアップが踏める Ｃ．学生・教職・教員の活発な意見交流
４－文理学部③	ａ．抽選科目の指定学年を３年次からに引き下げ ｂ．抽選落ちして取れないことを防ぐために，オンデマンド・対面の授業を選択できる ｃ．空き教室の掲示 ｄ．連絡と履修登録を1つのサイトにまとめる ｅ．コミッツの情報分割化 ｆ．体育館やプールなどの学生利用 ｇ．学祭での学科・クラスごとのイベント開催 ｈ．学科のキャンパス案内を学生主体で行う ｉ．外国語ラウンジの定期開催(月１～２回)	Ａ．他学部の講義受講（オンデマンド） Ｂ．自主創造などの全学部共通講義の内容の統一化 Ｃ．オープンキャンパスで学部案内を学生主体で行える Ｄ．STU の活用 Ｅ．電子学生証の作成

学部	理想の学部にするため提案	日大教育の未来のビジョン
5－経済学部	a．授業時間を増やす b．公欠の人への対応方法をシラバスに記載 c．単位の取得上限を増やす d．交流スペースを増やす e．学生企画のイベントを作ることができる環境を整える	A．大学本部主導の施設の見学ツアー，全学部対象の一斉授業イベントの開催 B．学内イベント用のポータルサイトの作成
6－商学部	a．授業内容にあった受講方法の選択 b．オフィスアワー以外での成績基準，成績方法について直接聞ける機会を増やす。 c．教職員とイベントなどで対話する機会を増やす d．設備の拡充（本の種類を増やす） e．システム改善（ポータルサイトの機能改善，アプリ化等）	A．学生・教職員双方が選べるようなシステム C．大学全体でのイベントなどの定期開催 D．学部関係なく休憩スペースの利用を可能にする E．大学全体での統一されたアプリ，サイトの作成
7－芸術学部	a．連携プロジェクトの見直し b．学部内外の交流機会 c．設備改善 d．学祭実行委員と学生の関係構築	A．個人留学の単位認定 B．全学部での交流機会や活動の共有 C．Wi-Fi などの通信設備環境の整備
8－国際関係学部①	a．オンデマンド授業の活用 b．付属の高校生との交流 c．出席確認のやり方の統一 d．設備改善（Wi-Fi） e．入学の時期を変える（語学の資格を用いた留学生限定での９月入学） f．授業開始日より早い日での履修登録開始日	A．全学部での出席確認のシステムの統一 B．大学の SNS の活用，mini CHAmmiT の開催
9－国際関係学部・短期大学部（三島校舎）	a．授業の抽選制度の撤廃 b．教材の Google Classroom でのデジタル配布の統一 c．政経・公民の教職課程の設立 d．短大が履修できる国際関係学部の科目を履修要覧でリスト化する e．段階を踏んで展開する科目（I. Ⅱ. Ⅲ ...）では，飛ばして履修できないように履修条件を厳格化 f．図書館のコピー機の改善 g．安定した Wi-Fi	A．近隣の学部との交流機会 B．全学部が共通で受講できるオンライン授業（毎回違う学部のおすすめ授業が受けられる等） C．キャンパスのバリアフリー化 D．短大から編入できる学部の選択肢を増やす

学部	理想の学部にするため提案	日大教育の未来のビジョン
10 －危機管理学部	a.「学びの手引き」「学修の手引き」の作成 b．丁寧な学部要覧の作成（履修モデル，時間割モデルを学校側が作成，提示） c．Wi-Fi システムの強化	A．CHAmmiT の知名度を上げ，フィードバックの質を上げる B．学部間での相互履修制度の強化 C．Wi-Fi 設備の共通化 D．学部間で機器，設備の貸し借りの実施
11 －スポーツ科学部	a．オンラインと対面のハイブリッド授業を増やす b．教職免許の資格取得，トレーナーとしての実践現場での経験 c．留学生との交流を増やす d．Wi-Fi の設備強化	A．各学部で海外研修のカリキュラムを取り入れる B．海外研修などの日大全体での交流を増やす，学部間のイベント交流を増やす C．学生証への電子マネーや学修履歴の機能，不正出席の防止，学修意欲の低下防止
12 －理工学部①	a．資格を取得することを前提とした授業 b．実務に近い授業内容 c．ChatGPT などの最新技術を取り入れた授業 d . 単位認定の機会を増やす e．評価方法の変更	A．TOEIC などの資格取得に重きを置いた英語の授業の実施 B．資格を持って実際に働いている人を呼んだ授業内容 C．新しい技術に対するルールの統一 D．セミナー参加による単位認定 E．GPA を GP として，実務経験を基にした評価とする
13 －理工学部②	a．コミュニケーションの活性化 b．空調の温度調整 c．電気の通電（船橋キャンパス） d．1 限は選択科目のみ，2 限以降に必修科目 e．授業･テストのフィードバック（全体評価･評価基準の公表・模範解答）	A．経営者を呼んだ講演会 B．運動部以外もシャワーを利用できる仕組み C．徹夜で研究ができるように仮眠室（簡易ベッド）の設置 D．最低限のフィードバック基準 E．TA にフィードバックの作成
14 －短期大学部（船橋校舎）	a．グループワークなどの能動的な授業の実施 b．授業のアーカイブ配信 c．同じ学科の先輩との交流 d．図書館の本の種類（専門書以外の小説や教養の本） e．ロッカーの設置	A．平日と土日授業での実施方法の改善 B．社会人との交流の機会を設ける C．遅刻や欠席，電車の遅延などを登録できるシステム
15 －生産工学部①	a．他学部の授業を円滑に履修できる b．既に履修した科目（単位）をオンデマンドなどで学び直しができる環境 c．ポータルサイトで時間割が必修科目と選択科目の区別がつく d．安定した Wi-Fi e．コンセントの増設 f．カラープリンターの増設	A．他学部の授業を円滑に履修できる B．学部・学科間で交流ができる機会 C．日大生同士が交流できるコミュニティの設置

学部	理想の学部にするため提案	日大教育の未来のビジョン
16 －生産工学部②	a．TA への質疑を制限 b．レベル別のクラス分けによる少人数体制での授業 c．提出物に対するフィードバック d．教養科目を他学部の先生に任せる e．専門の授業では企業やその道のプロに授業展開してもらう f．空き教室の活用 g．教室のモニター増設	A．学友を作るコミュニティ B．他学部や他学科の科目を卒業認定単位として必修化する（オンライン授業）
17 －工学部	a．第二外国語の授業の設置 b．オンデマンド授業を増やす c．TOEIC などの資格の勉強サポート d．同じ科目に対する教材の統一と内容の共有 e．学部内での CHAmmiT のようなイベントの開催 f．先輩との交流する機会を設ける g．システム改善（成績開示を早める） h．設備改善（クーラーの温度，カフェ，食堂の音楽）	A．授業時間内でのグループディスカッションの実施 B．相互履修制度の活用 C．日大ポイントの導入，ポータルサイトの機能の充実
18 －医学部	a．学生がカリキュラム策定に関わる b．研究や学会発表での経済的支援 c．学生が学修に関して自由に意見交換できる場所を設ける d．設備改善（講堂，実験室の空調，音響機器，解剖実験室の水回り，バリアフリー化） e．図書館での読める雑誌や本を増やす	A．カリキュラムの策定段階から学生が意見を述べる機会を作る B. 専門性の高い教育研究や研究支援制度，学部生や大学院生向けの支援の強化 C．透明性の高い運営とクリーンな設備
19 －歯学部	a．英語科目で歯科医療に関連する授業展開 （英会話，英単語など） b．空き教室の共有化 （掲示板，Google カレンダー） c．充電器を高速充電に変換 d．コンセントの増設（講義室） e．空調の調整（3 号館） f．校舎・教室の開放時間延長	A．英語授業の難易度を上げる B．医歯薬系の他学部連携 C．連絡手段の統一化 D．安定した Wi-Fi E．購買での弁当販売

学部	理想の学部にするため提案	日大教育の未来のビジョン
20 －松戸歯学部	a．オフィスアワーの充実 b．学生から教職員への授業評価を統一 c．科目ごとに配布物を統一 d．平常試験より国家試験につなげたカリキュラム e．課題・試験のフィードバック f．素点・偏差値の公開 g．科目ごとに欠席に対する基準の設置 h．個人学習スペースの充実 i．実験自習スペースの充実 j．挨拶をしっかりする k．縦のつながりを増やす l．ＯＢ．ＯＧ．先輩とのつながり m．社会と歯科のつながり	A．授業評価を統一化 B．課題・テストのフィードバック C．グループワークを増やす D．欠席の基準を明確化し，周知する E．安定した Wi-Fi F．自習スペースの充実 G．社会と職業の関わりが見える授業展開 H．学生・教員・職員が一緒に話し合えるような機会を周知する，開催する
21 －生物資源科学部①	a．学生主体の授業や体験型実習を増やす b．大学生によるイベントの企画 c．他学部交流イベントの専用サイトの作成 d．食券機を増やす e．設備改善 f．学修施設の充実	A．他学部の壁を越えた施設交流の普及 B．大学生がイベントを企画 C．Wi-Fi 環境の改善，情報共有の方法の改善，一元化 D．他学部のキャンパスで授業・ボランティアを受講できることの周知
22 －生物資源科学部②	a．同名授業に対する授業評価の基準の作成 b．履修登録に不安がある学生への相談コーナーの設置 c．学科間の研究意見交換会の開催 d．設備，環境改善（空調，Wi-Fi） e．キャンパスの案内板の改善	A．履修登録に関する十分な説明とシステム強化 B．学部間の研究意見交換会の開催 C．最適な温度，湿度を定期的に測定，ポケット Wi-Fi スポットの設置 D．キャンパス周辺での巡回バスの運行
23 －生物資源科学部③	a．他学科との交流できる授業科目の新設 b．学年問わず取れる，グループワークのある授業科目の新設 c．先輩から履修登録のアドバイスを受けられる仕組み d．安定した空調 e．安定した Wi-Fi f．成績評価基準の統一化 g．学部主催の交流行事の定期開催（文化祭，スポーツフェスタなど）	A．学部間で交流できる科目の新設 B．日大全学部合同の文化祭 C．グループワークの平等性

学部	理想の学部にするため提案	日大教育の未来のビジョン
24 －生物資源科学部④	a．受講したい科目が受講できるシステム b．試験等のフィードバック c．キャンパスアワーの延長 d．留学生との交流機会 e．図書館の空きスペースを１部屋分ラーニングコモンズ横に設置	A．サークルの補助金制度
25 －薬学部	a．授業のアーカイブを残す b．アクティブラーニングの導入 c．テスト後の点数開示・フィードバック d．成績の点数開示の徹底 e．空き教室を解放して自習スペースに f．自治体と学部が協力して作る授業 g．医療系の学部が交流できるコミュニティ作成	A．ハイブリッド授業の開催 B．１年次の課外授業の増設 C．シラバスに記載する成績評価基準を統一する D．ワールドカフェの１～４年生全学年の参加希望者が継続して参加できる E．安定したWi-Fi F．モバイルバッテリースペースの設置
26 －通信教育部	a．開講されない授業の撤廃 b．ハイブリッド授業の検討 c．外国語科目の単位認定（中国語，フランス語，ドイツ語） d．地方スクーリングの充実化 e．科目修得試験の全国統一開催 f．授業・テストのフィードバック g．素点の公開 h．対面サロンの開催 i．年代別交流会の開催 j．グループセッションのある授業	A．相互履修に通信教育部も参加 B．他学部の科目が取れる C．教員の採点評価基準の設定・公開 D．交流イベントの開催 E．掲示板の設置

3．参加者アンケート分析

本章では，当日実施したアンケートを基に，「令和５年度 学生 FD CHAmmiT」について参加者の視点から考察する。

まず CHAmmiT の認知度に関する設問を分析していく。

表１－１　今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
令和３年度	93	54.4%	78	45.6%
令和４年度	97	52.2%	89	47.8%
令和５年度	97	54.2%	82	45.8%

出所　各年度の「参加者アンケート」の結果に基づき筆者作成

表１－２　今回のイベント以前に「学生 FD」について知っていましたか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
令和３年度	84	49.1%	87	50.9%
令和４年度	103	55.4%	83	44.6%
令和５年度	83	46.4%	96	53.6%

出所　各年度の「参加者アンケート」の結果に基づき筆者作成

表１－１と**表１－２**は「FD」と「学生 FD」の認知度について昨年度，一昨年度の CHAmmiT 参加者アンケートの結果と比較したものである。

まず，表１－１からイベント参加者の「FD」についての認知度は昨年度と比べて今年度は 2.0%上昇しているが，令和３年度と比較すると 0.2%減少していることが分かる。他方，表１－２より「学生 FD」についての認知度は昨年度と比べて 9.0 %減少している。

以上の結果から，この２つの項目に大きな変化は見られないものの，今年を含む直近３年分の結果比較では減少傾向が見られ，改善の余地があることが分かる。特に，「学生 FD」に関する認知度については，次年度の学生スタッフが決まり次第，認知度上昇のための取組，工夫を考えたい。

次に今年度の満足度や参加者の意識の観点から考察する。

表２－１　「令和５年度 日本大学 学生 FD CHAmmiT」は全般的に楽しめましたか？

	非常に楽しい		楽しい		普通		あまり楽しくない		つまらない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
令和３年度	61	35.7%	87	50.9%	19	11.1%	2	1.2%	2	1.2%
令和４年度	73	39.2%	89	47.8%	22	11.8%	2	1.1%	0	0%
令和５年度	85	47.5%	76	42.5%	18	10.1%	0	0%	0	0%

出所　各年度の「参加者アンケート」の結果に基づき筆者作成

表２－２「令和５年度　日本大学 学生 FD CHAmmiT」を通じて，「学生 FD」について理解を深めることはできましたか？

	理解できた		概ね理解できた		少し理解できた		理解できない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
令和３年度	101	59.1%	63	36.8%	7	4.1%	0	0%
令和４年度	113	60.8%	64	34.4%	9	4.8%	0	0%
令和５年度	118	65.9%	53	29.6%	8	4.5%	0	0%

出所　各年度の「参加者アンケート」の結果に基づき筆者作成

表２－３「学生 FD」をほかの学生・教職員にも紹介したいと思いますか？　また，その理由は何ですか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
令和３年度	161	94.2%	10	5.8%
令和４年度	175	94.1%	11	5.9%
令和５年度	169	94.4%	10	5.6%

出所　各年度の「参加者アンケート」の結果に基づき筆者作成

表２－４「令和５年度　日本大学 学生 FD CHAmmiT」を通じて，学部に戻り，
「学生 FD」について何か行動を起こしたいと思いましたか？

	必ず何かしたい		機会があればしたい		学生 FD 組織があれば関わりたい		思わない		わからない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
令和３年度	33	19.3%	94	55.0%	15	8.8%	12	7.0%	17	9.9%
令和４年度	34	18.3%	108	58.1%	15	8.1%	9	4.8%	20	10.8%
令和５年度	33	18.4%	118	65.9%	7	3.9%	6	3.4%	15	8.4%

出所　各年度の「参加者アンケート」の結果に基づき筆者作成

表２－５「学生 FD」は，日本大学の教育（授業）改善につながると思いますか？

	大いにつながる		つながる		少しはつながる		つながらない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
令和３年度	84	49.1%	60	35.1%	25	14.6%	2	1.2%
令和４年度	92	49.5%	75	40.3%	17	9.1%	2	1.1%
令和５年度	104	58.1%	59	33.0%	15	8.4%	1	0.6%

出所　各年度の「参加者アンケート」の結果に基づき筆者作成

表２－１から，「非常に楽しい」という回答は昨年度から8.3%と大幅に増加しただけでなく，開催11回目にして最も高い数値となった。「つまらない」「あまり楽しくない」と回答した参加者はいなかった。さらに，「非常に楽しい」又は「楽しい」という回答は90.0%となり，満足度はここ数年右肩上がりで上昇している。頻繁に対面・オンライン研修を開催したことによるスタッフスキルの向上及び完全対面での開催となったことが影響したと推測できる。

表２－２では，「理解できた」，「概ね理解できた」という回答が，95.5%を占めている。特に「理解できた」は65.9%と過去最高を記録した。よって，CHAmmiTは参加者が学生FDについての理解を深めるために良い効果があったと言える。

表２－３から，「学生FD」をほかの学生・教職員にも紹介したいと感じた参加者が94.4%いることが分かった。CHAmmiT参加者の満足度が高いことが推測できる。

表２－４を考察する。この表では，学生FD活動について「必ず何かしたい」，「機会があればしたい」と回答した参加者は，昨年度よりも7.9%と大幅に増加し，84.3%を占めた。「思わない」という回答は，昨年度よりも1.4%減少し，今年度CHAmmiTが学生FDの契機となり，参加者の意欲を高めることができたと言えるだろう。

最後に**表２－５**を考察する。「学生 FD」が，日本大学の教育改善に「大いにつながる」，「つながる」と回答した参加者は91.1%であった。特に「大いにつながる」は58.1%と過去最高を記録した。このことから，ほとんどの参加者が学生FDの教育改善への有効性を実感していることが推測できる。

以上の結果から，今年度のCHAmmiTが多くの参加者にとって有益な経験になったことが推測できる。また，CHAmmiTが参加者の学生FDへの理解を促進し，意欲を駆り立てることにつながったと考えられる。

表３－１　次年度もこのようなイベントが開催されるとしたら，参加したいですか？

	何があっても参加したい		声がかかれば参加したい		あまり参加したくない		参加したくない		企画側として参加したい	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
令和３年度	18	10.5%	128	74.9%	12	7.0%	7	4.1%	6	3.5%
令和４年度	33	17.7%	139	74.7%	9	4.8%	3	1.6%	2	1.1%
令和５年度	27	15.1%	138	77.1%	7	3.9%	5	2.8%	2	1.1%

出所　各年度の「参加者アンケート」の結果に基づき筆者作成

表３－２　今年度は完全対面開催でしたが，オンラインも併用した形式での学生交流等のイベントはあったほうが良いですか？

オンラインも併用してほしい		対面のみで良い		オンラインのみで良い		意見収集にしぼりオンラインもあって良い	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
76	42.5%	101	56.4%	1	0.6%	1	0.6%

出所　今年度の「参加者アンケート」の結果に基づき筆者作成

表３－１から，「何があっても参加したい」と回答した参加者は15.1%おり，昨年度より2.6%低かった。「声がかかれば参加したい」との回答は，昨年度から2.4%増え，77.1%と非常に高かった。「あまり参加したくない」,「参加したくない」という意見は昨年度より0.3%高い6.7%となっているが，変わらずイベントに前向きな意見が多いと言える。

次に**表３－２**では「対面のみで良い」と回答した人が最も多く，全体の56.4%を占めていた。一方，「オンラインも併用してほしい」という回答は全体の42.5%であった。対面とオンライン併用の両方が支持されていることが分かる。

以上より，参加者は継続して次年度以降もCHAmmiTに参加する意欲はあるものの，「声がかかれば参加したい」という受け身の姿勢の者が多い。そのため，教職員の方の力も借りつつ，積極的に参加を募ることが重要であると考える。また，開催方法については対面参加のニーズの高さが窺える一方，オンラインを併用することでより参加者のニーズに見合うのではないかと考えられる。

4．学生スタッフ・公募ファシリテーターからの所感等

「学生スタッフとして臨んだ初めてのCHAmmiT」　相﨑大地

（日本大学商学部商業学科３年・令和５年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ キャプテン）

私が学生スタッフに応募した理由は，参加者として昨年度CHAmmiTを経験し，良い印象を持ったからである。特に，学生主体で大学・学部をより良くするためのイベントが開催されていることに強い感銘を受け，応募を決意した。

今年度，私はキャプテンを務めた。個人目標は「参加者にとって今までで一番楽しいCHAmmiTを実現する」であった。そのため，事前準備が当日の出来を大きく左右すると考え，Zoomを用いたスタッフ研修に特に力を入れた。そこでほかのキャプテン及び昨年度を経験したスタッフの力を借り，ホストを７人でシフトを組み担当した。本番前日までの１週間は特に力を入れ，研修を18回行い，ファシリテーションに不安を感じているスタッフのスキル向上に務めた。

迎えたCHAmmiT当日は230名の方にご参加いただき，全てのグループで活発な意見出しが行われた。また事後アンケートでは，参加者の47.5%から「非常に楽しかった」，42.5%から「楽しかった」との回答が寄せられた。「非常に楽しかった」という回答の割合は，2013年から続く歴代CHAmmiTの中で最も高かった。この結果から，「参加者にとって今までで一番楽しいCHAmmiTを実現する」ことができたと感じている。

来年度はスタッフ人数の増加に取り組みたい。今年度は32名だったため，OBの方々の力を借り，かつ全員がファシリテーターを担当することになった。しかし，各スタッフに長所・短所がある以上，ある程度は役割分担も必要だと考える。そのため，来年度は例年以上に教職員の方々と連携し，スタッフ募集に力を入れたい。スタッフの人数を増やし，各自の長所が活きるように役割分担をすることで，より参加者の方々に充実した話し合いの場を提供できればと思う。

「初参加のCHAmmiT」　荒木姫菜子

（日本大学松戸歯学部歯学科２年・令和５年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ キャプテン）

初めにこの場をお借りして，今年度CHAmmiT関係者の皆様に改めて御礼申し上げる。

新型コロナウイルス感染症が収束して初の対面開催を学生スタッフ１年目として乗り越えられたのは，関係者の皆様のお陰だと感じている。学生スタッフとしては１年目と未熟ながらキャプテンとしてCHAmmiTに関わることができたことがとても良い経験だと思い，今でも噛み締めている。

松戸歯学部にFD推進センターに関与している先生がいらっしゃることや文化祭の役員の先輩からCHAmmiTという活動を教えていただいたことから興味を持ち，学生生活を自らの行動でより良くしていきたいと思い，今年度，学生スタッフとしての参加に至った。

CHAmmiT自体には当日の参加学生としての経験もなかったため，前年度までの経験者の先輩から学び得ることが多くあった。その甲斐あり，キャプテンの１人として本番直前は経験者の先輩に混ざって今年度から参加している学生スタッフのファシリテーターをアドバイスできるまでの実力になることができた。

当日，私たちは個々がファシリテーター研修で積み重ねてきた経験を最大限に発揮できたと感じた。特に最後に発表する学部提案書から成果の発揮を感じられ，担当していた班（学部）の意見をしっかりと引き出し，学部への提案内容を限られた時間でより明確に提示できた。今回は初参加ながら，達成感を感じることができたのは，学生スタッフの仲間や教職員の皆様との連携がよく取れていたからこそ得られたものであると考える。

最後に改めて，関係者の皆様には心より感謝申し上げたい。今回の活動を通して，それぞれの学部の方々が，学生生活委員会の先生方や教務課や学生課等の各課の協力を得て，より勉強のしやすい環境を得ることができれば幸いである。

このFD活動が将来の日本大学の発展に寄与することを願い，締めくくる。

「CHAmmiT参加記：不祥事からの立ち直りと学び舎への新たな一歩」 根岸啓斗
（日本大学生物資源科学部バイオサイエンス学科１年・令和５年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ キャプテン）

昨今の日本大学の不祥事をどうにかしたいと思い，何か自分にできないかを考えていたところに，CHAmmiTを見つけて参加した。

最初は右も左も分からない状態で始まったCHAmmiTだった。私はこの場所でやっていけるのかと心配だったが，先輩たちが丁寧に教えてくださったおかげでCHAmmiTに貢献することができた。キャプテンとしての仕事もさせていただき，チームの前線に立ち，不器用ながらも毎回のミーティングでチームを引っ張っていけたと思っている。

また私は，このCHAmmiTを通して多くのことを学んだ。チームで問題に取り組む力やファシリテーターとしての能力など，普段では経験できないことができて非常に有意義だった。さらに問題に直面したときの柔軟性や問題解決能力の向上も，このCHAmmiTから得た大きな収穫である。計画どおりに進まない状況に対して冷静かつ柔軟に対応することで，困難を乗り越える自信が生まれた。

当日のファシリテーターはとても楽しく，同じ学部の学生や教授との会話ではとても共感のできる点が多かった。皆同じ問題を抱えている点を共有したことで，自らの学部のことを改めて見直し，これから学部に何が必要なのかを考えるきっかけになった。ファシリテーションのグループで書き上げた提案書が，これからの大学生活を変えていけたら，今回自分が参加した意味になると考える。

最後に，今回のCHAmmiTで得た経験を生かし，来年参加する場合は先陣を切っていけるように努力したいと思っている。

「Challenging CHAmmiT」 垂見麻衣
（通信教育部商学部商業学科３年・令和５年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ マネジメント）

この３年間学生FD CHAmmiTに携わり，自学部だけでなく，全学での様々な良い変化が見えるようになりとても嬉しく感じている。

今年度のCHAmmiTは，完全対面式で開催された。これまでの過去２年間では，オンラインでの運営や

担当をしてきたこともあり，対面で自学部のテーブルを担当できたことはとても光栄で新鮮であった。

今年度はマネジメントとして運営に参加した。マネジメントを担当することで，それぞれが任される役割によって負担の大きさが異なることを把握し，これまでのセクレタリーでの活動とは異なるものであるということを感じた。マネジメントでは毎度のミーティングの調整だけでなく，マニュアル作成などCHAmmiT の中核的な役割を担当したため，短期間で書類を仕上げる必要性に駆られることが多く，チームの協力が非常に重要とされた。誰か一人の協力が期日までに終わらないと，全体に迷惑をかけることがあり，細やかなケアが必要であった。しかし，今年度のマネジメントのメンバーは一人一人が当事者意識を持ち，自己有用感を醸成しながら，プロジェクトに貢献できたのではないかと考える。

課題として挙げるならば，初めて参加した時期から改善されていない点が継続して存在している点である。CHAmmiT 本番まで十分な準備期間が確保されず，ファシリテーションの練習会を夏に集中させた結果，バタバタ感が否めず，多忙なメンバーのオンライン参加を認めながらも，結果的に準備が不十分，そして方向性が定まっていないことが見られた。また，アワードのような別企画を検討しながらも，実際にはほとんど行動に移されない傾向が続いている。こうした慢性的な「企画倒れ」を改善して，もっと丁寧にCHAmmiT を開催し，開催後のイベントの時間を確保できるようになることを期待する。

最後に，CHAmmiT は学生主体であるべきだと考える。時間の都合で学務課がイニシアチブを奪い，学生不在のまま何かを決定してしまうのは学生主体とは言えない。何かを実現しようとする学生の意見を最大限に取り入れ，共に全身する姿勢で今後の CHAmmiT を開催していくことを期待したい。

「初めての CHAmmiT」 望月咲優

（日本大学理工学部物質応用化学科１年・令和５年度 学生 FD CHAmmiT 学生スタッフ　マネジメント）

私は，今年度初めて CHAmmiT に学生スタッフとして参加させていただいた。私が今回参加した理由は大きく二つある。

第一に，入学当初に配布された「ミライヲツクル Learning Guide」という冊子で CHAmmiT の活動を知り，他学部の学生との交流や教職員と教育について意見を交わすことができるということに惹かれたからである。

第二に，大学生になり，今まで自分が挑戦したことのないことをやってみたいと思ったからである。正直にいうと，大学入学したての私にとって今の大学の教育に対する自分の意見というものはあまり持っておらず，,「日本大学の教育をより良くしていきたい」という思いはあまり持っていなかった。そんな私でも今回CHAmmiT のスタッフとして参加させていただけたことに対して日本大学 FD 推進センターの皆様に感謝を申し上げたい。

さて，私は今回マネジメントという役割で CHAmmiT に関わらせていただいた。初参加のためCHAmmiT で仕事の進め方が分からず，最初はマネジメントの仕事への取組が消極的になっていた。しかし，昨年度の学生スタッフ経験者の方々が指示を出してくださり，次第に積極的に取り組むことができるようになった。最終的には投げかけられた意見に対して自分の意見を伝えることもできるようになった。またCHAmmiT の定期ミーティングの際には，学生スタッフの皆が優しく話しかけてくださったおかげで，毎回のミーティングで様々な人と話すことができた。CHAmmiT の学生スタッフの皆にも感謝を申し上げたい。

CHAmmiT 全体を通して，私自身の反省点としては，CHAmmiT の全体像や仕事内容の想像がつかなかったとしても，自分の意見を伝えたり，スタッフ経験者の方々に積極的に質問したりと，もっとできることがあったのではないかということである。また，初参加ということを言い訳にして昨年度のスタッフの方々に頼りすぎていた部分もあった。来年度の CHAmmiT からは，頼りになる学生スタッフの先輩方が卒業さ

れ，私自身不安でいっぱいだが，私が今年度先輩方に助けていただいたように，来年度は学生スタッフ経験者としてCHAmmiTを盛り上げられるようにしていきたいと思う。今後のFD活動のより良い発展を願い，締めさせていただく。

「新しい自分につなげる経験としてのCHAmmiT」 沈恩妃
（日本大学商学部商業学科１年・令和５年度 学生FD CHAmmiT学生スタッフ アート）

令和５年，韓国から来日し学生生活を始めた。２ヶ月が経つ頃には，授業を受けることにも徐々に慣れ始めたため，私は様々な活動に参加したいと思った。他学部，教職員，そして多くの日本人学生との交流に興味があったからだ。私が学生FD CHAmmiTに応募した理由はこのとおりである。

学生FD CHAmmiTでは，日本大学各学部の学生が集まり，企画・運営からイベント開催までを行う。これらは私にとって本当に新鮮であった。まだ留学１年目であるため，企画や運営に携わることは難しいと思った。しかし，元々デザインを考えることには自信があったため，アートチームに志願した。

今年度，私が取り組んだことは大きく２つある。一つ目に，ポスターとＴシャツのデザインを制作することであった。特にポスターはCHAmmiTを宣伝し，学生に伝える大事なものであった。私はデザインの基本的な知識及び制作ツールに関する知識を持っていたので主に制作を担当した。最初に，デザイン案を３つ考え，アートチームの全体会議を通じて最終的に１つに決定した。次に，決定したデザインを元に更に良い方向に修正を重ねた。最後に，アートチーム内部での確認及び学務課の確認を経て，実物の制作に進んだ。

二つ目に，学生ファシリテーターとして練習を繰り返した。当初，ファシリテーターの練習では他学部の話を聞くことに集中していた。しかし練習を繰り返すうちに，「このように話す方が良いかも」，「この内容もCHAmmiTに合うかも」などと考え，より真剣に参加するようになった。他学部について深く知る機会になったが，それ以上にファシリテーターとして話し合いをより良い方向に導く能力を成長させることができた。

最後に，学生FD CHAmmiTへの参加は他学部，教職員，そして多くの学生との交流を求めていた私にとって掛け替えのない経験となった。日本大学の中でCHAmmiTが更に知名度を上げ，多くの学生にとって他学部との交流の場になると同時に，日本大学の未来について忌憚なく語れる場になることを願う。

「四年間の軌跡～より良い日本大学になりますように～」 竹田蘭丸
（日本大学国際関係学部国際総合政策学科４年・令和５年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ インフルエンサー）

初めに，四年間，CHAmmiTに参画させていただいたことを感謝申し上げる。重ねて，今年度のCHAmmiTにご参加いただいた全教職員，全学生にも感謝申し上げる。私が関わってきた四年間のCHAmmiTは日本大学の変革期であったことを確信している。コロナによるオンライン授業の導入，理事長・学生の不祥事による組織体制の問題といった大きな出来事があった。

私が最初にCHAmmiTに参画した理由は，教育改善をしたい！というよりは，他学部の学生と活動できることに一番の魅力を感じた。しかし，実際に活動してみると，意識の高い学生が多く，勉強になることが多々あった。そして，四年間活動してきて見えてきたものは，「学部間格差」であった。私は，三島キャンパスに通学しており，他学部のキャンパスと比較してみてもあまり先進的なシステムはない。そのため，活動を通して様々な学部の状況を聞けば聞くほど格差に関しては敏感になった。

今年度の私のスタッフの活動として注力したことは，スタッフ間のチームビルディングである。理由としては，CHAmmiTのイベントそのものを成功させるためでもあるが，学部間格差を少しでもなくそうと考えたためである。具体的には，スタッフ間での意見交換を円滑に進めようという狙いがあった。円滑になる

ことで，スタッフ間においての学部の情報交換を促進させ，自学部でも活用できそうな案が見出しやすくなると考えた。また，16学部交流のイベントはそんなに多くないため，「出会いを大事にしてほしい」という想いも強かった点もある。

CHAmmiT当日は，301教室の室長を務め，エンディングでは林理事長にお越しいただいた。室長制度を導入してから二年目であるが，前年度においては連携が不足していたため，都度，LINEで連携を取り合うことで円滑に4時間を乗り切ることができた。当日，円滑にイベントを進めることができたのは，当日までのチームビルディングがあったからだと自負している。

今後，CHAmmiTが続いていくという想定の下，私が唯一やりきれなかったことを記す。4年間従事してきて，年々イベントは進化し，成長していると感じている。しかし，意見の質や量は頭打ちであることも感じている。そのため，「mini CHAmmiT」の開催を祈願したい。「mini CHAmmiT」の概要としては，16学部の学生が自学部のことを紹介するというものである。例えば，授業方針や設備，施設といった幅広いことを紹介する。その中で，互いに導入できそうなことを模索するという会である。意見が頭打ちしている原因としては，他学部の制度や施設などを知らないため，意見に発展性がなくなってきていることが考えられる。つまり，CHAmmiTでより質の高い意見や要望を出すためには，他学部を知る必要がある。その上で，他学部の良いところを導入することにより，学部間格差もなくなると考える。

最後に，改めて四年間CHAmmiTのスタッフに従事させていただいたことに感謝する。また，少しでも卒業した学生が誇りを持てるような日本大学になることを強く祈願して，締めくくる。

「『大学生らしさ・自分らしさ』の中心だった日本大学 学生FD CHAmmiT」 山本峰広
（日本大学経済学部経済学科４年・令和５年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ　インフルエンサー）

まず初めに，今年度のCHAmmiTを共に作りあげて下さった全ての学生・教職員の方々，そして日本大学FD推進センターの方々に改めて御礼申し上げたい。

私がこのCHAmmiTに初めて参加したのは大学2年次で，この頃は新型コロナウイルス感染症拡大の影響でオンライン授業が継続されている最中だった。大学への通学のため希望を胸に上京をしたが，誰とも会うことができず，ただパソコンの前で授業を受ける日々。そんな中，この団体の存在を知り，様々な学生と一つの目標に向かって協力しながら突き進む経験を得たいと考え参加を決めた。そして今年はメンバーを引っ張っていく立場となった。

今年度私はインフルエンサーを務め，そのほかにもメンバー同士の親睦を深めるための企画・運営も担当した。

インフルエンサーとして力を入れたことはSNSを介してCHAmmiTの活動を大学内外に積極的に発信したことである。昨年度までは投稿の内容が画一的で，一部からは面白みがないなどの声を耳にした。そのため今年は定期ミーティングの報告だけではなく，メンバー一人一人に活動をした感想をインタビュー形式でまとめたものを投稿した。そのほかにも，理事長セレクト講座の感想やメンバーが普段通っている学部やキャンパスの魅力なども発信することができた。インフルエンサーの仕事をして特に感じたのはメンバーの顔の変化である。本番までのカウントダウンと本番後でメンバーに意気込みと感想を取材する投稿をした。顔写真と共に投稿したのだが，後者の方がメンバーの顔が柔らかく笑顔が見えており，またCHAmmiT本番中も談笑しているグループがあったことが印象的だった。

インフルエンサーの仕事のほかにも学年の枠を超えた交流と過ごしやすい環境を整えることにも注力した。昨年度まで公募スタッフとして参加していて常に感じていたのが学年の壁だった。この学年の壁をなくし，CHAmmiTを共に創り上げていく仲間としての自覚を個々が持てるよう工夫した。例えば，例年よりも本番までの準備期間が短かったため，定期的なミーティング以外でも交流の機会を増やした。その結果メ

ンバー間の絆が深まり，学年や学部の枠を超えて意見を言うことができるようになった。

CHAmmiT の事後ミーティングの後もメンバーとの交流が続いており，その大半が来年度も引き続き参加したいと話している。ぜひこのような意思を持った学生たちを来年度も中心メンバーとして活躍させてほしいと考える。

最後に，私は大学入学と同時に上京し，不安を感じていたときにこの活動に参加した。大学２年次から今年までの３年間でかけがえのない仲間と出会うことができ，日本大学に入学していなければ経験できなかったことも多く経験することができた。まさに私の大学生活そのものだったと感じている。ここまで私を育てて下さった日本大学が CHAmmiT を通してこれから更に良いものになることを切望している。

「理想の CHAmmiT と理想の大学」　渡祐太

（日本大学工学部情報工学科４年・令和５年度 学生 FD CHAmmiT 学生スタッフ セクレタリー）

まず，今年の日本大学学生 FD CHAmmiT（以下，CHAmmiT）の開催につき，ご尽力いただいた教職員の方々，学生スタッフ，参加者を含めたそのほかの関係者の皆様に厚く御礼申し上げる。今年は昨年とまた変わり，対面のみの開催であった。それでも大きな問題もなく，本番を大成功で収めることができたのはひとえに皆様のお力添えの賜物であると感じている。

今年で３年目の参加となる CHAmmiT は今までの中で一番主体的に活動できたと考えている。昨年の反省点であったスタッフの連携についてだが，今年はコアスタッフを廃止し，学生スタッフのみになった。これにより学生スタッフ全員が実質コアスタッフとなり，皆が主体的に活動し，グループも今年の参加者全員の団結力向上に貢献した。それぞれチームでもスタッフでも仲が良く，とても良い試みであったと思う。

チームの中で私はセクレタリーを担当した。昨年担当したこともあり，議事録や報告書の作成方法や流れの説明，修正等を務めた。今までの CHAmmiT の知識をフル活用し，できるだけ早く，そして皆に分かりやすい文やレイアウトを心掛けて，作成した。ほかの皆は初めてのセクレタリーであったが，報告書の書き方や文面に関して正直私よりもかなりクオリティが高く，私も負けじと良い部分を参考にしながら作った。今年は追加でオープニングやエンディングも担当した。動画編集を本格的に行ったのは初めてのことだったので，作成には時間と労力がかかった。しかし，チームの皆が気にかけてくれ，素材を加工してくれたり，写真を用意してくれたりしたため完成することができた。本番で一部動画のミスがあったことや連携不足が否めなかったのが反省点であるが，皆に認めてもらえるだけの仕事はできたのではないかと感じている。本番はファシリテーターを担当した。練習会では経験者側だったため，結局本番まで私がファシリテーターの練習をする機会はなかったが，しっかりと提案書の作成ができ，意見をまとめることができた。

反省としては，学生の主体性についてである。現在の学生 FD の活動は９月の当日に向けて準備を進める “CHAmmiT” のイベントスタッフでしかないように感じることがあった。勿論まとめた内容は各学部に提案書として提出されるが，ほかにも教育改善のためにスタッフである我々側から提案し，活動を設けるべきではないだろうか。私が参加していた期間でもいくつか案は出されていたが，結果として実行には至っていない。来年以降この CHAmmiT に参加する後輩たちには，未来の日本大学を理想の大学に，そして各学部が思い描く理想の学部に近づけられるよう，当日だけにとどまらない CHAmmiT にしてもらいたい。この活動に関わる人はそれぞれ大学を良くしたいというエネルギーと責任感に満ちているので，CHAmmiT を更に良い活動に進化させていけると信じている。

私は卒業するが，これからもこの活動が教育改善の発信地となり，教職員と学生をつなぎ，日本大学の教育が発展することを心から願っている。

「最良の教育を超えてゆけ」 大久保真菜

（日本大学商学部会計学科３年・令和５年度 学生 FD CHAmmiT 学生スタッフ セクレタリー）

私は高校２年次，カナダ留学に行き，日本と海外の教育の違いを知った。そのときから，教育問題について興味があった。私が学生スタッフとして CHAmmiT に参加したのは，一学生として教育改善に携われる機会は貴重であると考えたからである。

同じ意志を持った仲間と，同じ目標に向かって進んでいく過程は，自分にもできることがあるのだと再確認するとともに，自分に自信を持つきっかけにもなった。この一つのチャレンジは，私には勇気のいることだった。しかし今では，CHAmmiT のスタッフとして学生 FD 活動に参加することができて本当に良かったと考えている。あのとき，勇気を出して参加を決意した自分がいたことで，未来への自分の糧とすることができたのだから。得られたものは多かったが，最も大きな収穫は「仲間」である。ほとんど初対面だったにもかかわらず，初めて対面で集まったときの和やかな雰囲気を私は忘れられない。ミーティングが終わる頃には，スタッフ同士で，まるでずっと一緒にいた友達のように色々な人と会話を交わしていた。

私はセクレタリーとして，報告書や議事録の作成を担当した。根が小心者だったので，表であれこれと発信していくより，裏方としてサポートしていきたいと考えたからである。そうして担った役割は，奥が深く，スタッフとして俯瞰的にミーティングを見詰めながらも，主体的に各方面と連携していくものだった。報告書を作成する上で，ミーティングの流れを追いながらも，今回はどのようなことを学んだのかを復習する形がいつの間にかできていた。これは，ファシリテーション研修に大いに役立てることにつながっていた。一方で，毎回どのようにして「CHAmmiT 活動」を外部に発信していくか，頭を悩ませていたことは印象深い。インフルエンサーとアート担当渾身の宣伝を拾った参加者はきっと，次に情報収集としてホームページ上に掲載された報告書をチェックするはずである。つまり，興味を持った参加者を取りこぼさずに「CHAmmiT」に導く役目は，セクレタリーの自分たちだと考えられたわけである。報告書の見栄えも十分に意識していたが，貼り付ける写真だったり読みやすい文章だったりも，極限まで意識して作り上げた。それで読者の皆様の興味関心を引くことができると，嬉しい次第である。

結果的にキャプテン，マネジメント，インフルエンサー，アート，セクレタリーのそれぞれの役割を担うメンバー，公募ファシリテーター，OB・OG スタッフ一同で作り上げた集大成は，成功したと言える。ご協力いただいた参加者の皆様，サポートして下さった教職員の皆様には深謝申し上げたい。ついては，この活動が最良の大学教育のそのまた最良を時代とともに超えることができるよう期待するとともに，私のように何かを変えたい学生が集まる場となるよう，密かに願っている。

「最高峰の教育を求めて」 大賀尚輝

（日本大学法学部政治経済学科２年・令和５年度 学生 FD CHAmmiT 公募ファシリテーター）

私は今年度初めて CHAmmiT に公募ファシリテーターという立場で参加した。本学の先輩から CHAmmiT という学生主体の組織の存在を教えてもらい，本学において最高峰の教育を提供する場を実現させるべく８月下旬より参加した。本番まで１ヶ月もない中での参加であったため不安があったが，先輩や同期の方々に支えられ本番では自信を持ってファシリテーターに臨むことができた。

当日は，法学部の学部提案書作成に携わり自身の学部の改善点などを参加者の法学部生から多く引き出すことができた。実際に生の声を聞くことで多角的な視座を得ることができ，本学における教育の改善点を学部提案書として作成することができた。

今回 CHAmmiT に公募ファシリテーターという立場で参加してみて，本学の教職員だけでなく学生も日本大学をより良い大学にしたいという思いがとても強いということを痛感した。私は今後も CHAmmiT という学生組織を通じて最高峰の教育実現のために，精一杯尽力していきたいと考えている。

またCHAmmiTでは他学部の学生との交流ができた点も魅力の一つだと感じている。日本大学は国内最大規模の大学であり，それゆえに学部間の隔たりが否めない。そのような状況で，CHAmmiTでは全学部の学生と交流を深めることができ，大いに楽しみながら活動することができた。私が参加したのは１ヶ月程度と非常に短い期間であったが，交流は今でも続いておりCHAmmiTに参加し学生生活がより豊かになったと感じている。

自ら学ぶために自ら考え，そして自ら道をひらく自主創造の精神を持ち，多くの卒業生，在校生，これから入学する学生のためにも伝統ある日本大学を盛り上げていきたい。

「共同体としての日大」　早乙女雅哉

（日本大学生産工学部環境安全工学科１年・令和５年度 学生FD CHAmmiT 公募ファシリテーター）

まずこの所感を書くにあたって，令和５年度CHAmmiT関係者の皆様には厚く御礼申し上げる。

私は参加をするまでCHAmmiTがどういったものであるのか全く知らなかった。さらに私が申し込みを終え，正式に参加をしたのはCHAmmiT本番まで残り１週間であった８月２日であり，練習期間は非常に限られていた。そんな中であっても，先輩方は私に対してとても丁寧に指導してくださり，その存在はとても大きいものであった。１週間の練習期間でファシリテーターとしての役割や，進行の手順を教えていただいた先輩方に対しては尊敬の念に堪えない。

私が今回のCHAmmiTに参加して学んだことは，日本大学の人と人とのつながりの強さである。本来関わる機会の少ない学部，学科の異なる者たちがこのCHAmmiTに集まり，一種の共同体として日本大学をもっと良いものとするその姿勢には共通の意識を感じ，感動した。この大学，学部間での交流が更に進めばもっと良い大学になることは間違いないと確信をした。

日常的に他学部の学生と交流，意見交換を行う場があれば，他学科のことを知るきっかけになるのは勿論のこと，自らの所属している学部学科の思わぬ一面を再発見することにもつながる。その結果一見関わりがないような分野との融合によるアイデアが生まれることにもつながるのではないかと考える。

最後になるが，私は今年度のCHAmmiTをきっかけに生産工学部，ひいては大学全体の発展のために，全力を以てこれに取り組む気概である。来年度も自分ができる最大限の努力を行おうと思う。